

# 真の社会保障は、誇り・味方・居場所を保障する

浅野史郎 評  
(神奈川大学教授)

私が「ゆきさん」と呼び敬愛する大熊由紀子さんの素敵な本。ジャーナリストらしく、福祉や医療の常識を覆すような実践を、現場の取材で発掘して、共感をもって紹介する。

ゆきさんが驚き、感動した実践の数々。精神科病棟を退院した数人と町中での活動を始めた、北海道浦河町の「べてるの家」の向谷地生良さん。中でも、ユニークな幻覚を発表した患者が表彰される「幻覚&妄想大会」や「当事者（による）研究」が有名である。生後1カ月の赤ちゃんから98

歳のお年寄りまで、誰でもいつでも受け入れる「このゆびとーまれ」を始めた惣万佳代子さんたちの活動は、「富山型」として行政も変えた。

現在の医療、福祉の現状への容赦ない批判の言葉も満載である。「日本型福祉社会論」への批判を「事実誤認3点セット」として示している。さらには、「介護をめぐる9つの誤解」も興味深い。そのうちの⑤「女房だってやっていける」(労働省元事務次官)といった誤解は今や昔話か。その他、「認知症の精神病入院はやめなさい」、「子宮頸がんワクチンの接種は中止すべし」、「国民負担率から国民連帯率へ」などなど鋭い批判の言葉が並ぶ。

この本の終章は「わが母の地域包括ケア」である。末期がん、要介護4のお母様が在宅ケアで「誇り・味方・居場所」に包まれて、安らかな最期を迎える様子が描かれている。理論と実践、公と私が見事に融合しているゆきさん。この本で一番感動するところである。



## 誇り・味方・居場所 ——私の社会保障論

大熊由紀子 著  
ライフサポート社  
本体 1,600 円+税  
2016 年 3 月刊